絆～

ほんとうに

大切なもの

【パブー版まとめ】

比良岡美紀

目次

(1) 1
(2) 2
(3) 3
(4) 5
(5) 7
(6) 8
(7) 10
(8) 12
(9) 13
(10) 15
(11) 16
(12) 17
(13) 19
(14) 21
(15) 23
(16) 24
(17) 26
(18) 27
(19) 29
(20) 31
(21) 32
(22) 34
(23) 36
(24) 37
(25) 38
(26) 40
(27) 41
(28) 42
(29) 44
(30) 46
(31) 47
(32) 48

(33) 50
(34) 51
(35) 53
(36) 54
(37) 56
(38) 57
(39) 58
(40) 60

奥付

(1)

原田俊彦は平凡なサラリーマン。妻と息子と 3 人暮らしだ。豪邸とはいえないが、5 年前に家を建てた。費用は双方の両親から少しずつ出してもらい、自分たちの貯金と合わせて足りない分のローンを組んだ。おかげで月々の負担も少なく、完済までの期間も短い。いい買い物だったんじゃないか、と今でも俊彦は時々思う。妻のミチルは専業主婦。短大卒業後、俊彦と同じ会社に勤めていた。職場結婚というやつだ。息子の剛一は今年 12 歳、小学 6 年生になる。

ミチルは小学受験を主張したが、俊彦は反対した。それで公立小学校へ行かせたものの、剛一の通う小学校は学級崩壊がすすみ、満足な授業が受けられない。そのため三年生から塾へ行かせることにしたが、そうすると当然、中学受験が視野に入ってくる。剛一が 6 年生になってから、ミチルは毎日のように、同じ塾の子供がどこを受けるつもりだの、この中学は少人数教育でとても充実しているだの、俊彦にとってどうでもいいことばかりまくし立てるようになった。

その都度俊彦は、「後にしてくれよ」と言うのだが、それがミチルには不満なようだった。剛一のことを思うなら私の話を聞くべきだわ、聞かないのは剛一への愛情が薄いからよ、とミチルは言った。俊彦が呆れた顔をしようものなら、あなたは剛一がどうなってもいいのね、と言って俊彦を困らせるのだった。

いったい俺はあいつのどこが気に入って結婚したんだろうか——俊彦はこの頃そう思うようになっていた。それだけミチルの受験熱にうんざりしていたのかもしれない。

大学から、卒業 15 年目の集まりを催すという案内が来たのはそんな時だった。在学中は同窓会など意識したこともなかったが、もう 15 年も経つのかと、俊彦は過ぎ去った月日を思った。

そういえば、あの頃思いを寄せていた女の子は今どうしているだろう。その子はとても物静かで、清楚な印象だった。それだけでもミチルとは正反対だが、他人の噂話などするような人ではなかった。名前は確か.....そう、川端依子だ。卒業を前に思い切って告白したら、少し当惑したように、田舎に帰って親の決めた相手と結婚するんだと言った。

あとから聞いた話では、その相手は 15 歳も年上ということだった。そんなオヤジのどこがいいんだ、とそのときは思ったが、気づけば自分もそのオヤジと同じ年だ。今の自分が 15 歳年下の女の子と結婚する。そう考えると、俊彦はまんざらでもない気がするのだった。

(2)

川端依子は故郷に戻って親の決めた相手と結婚、今年で 15 年になる。15 歳も年が離れているせいか、会話はあまりない。結婚当初はそんなものかと思っていたが、幼なじみの松平理恵が結婚し、その生活ぶりを聞くにつれ、そうではないと分かった。理恵の夫は、理恵に言わせればとても口うるさく、家事一切に口を出す。共働きだったが家事はもっぱら理恵の仕事だ。

何もしないくせに文句ばっかり言うんだもの、そんなに言うなら自分でやればって、言ってやったわ！ と言いながら、でも本当に彼が家事全般こなすようになったら、それはそれで嫌なのよね、女心はフクザツだわ、と言って依子を笑わせた。

笑いながらも依子は、理恵夫婦を羨ましいと思っていた。自分はとても、夫に鬱憤をぶつけるなんてできないし、ましてや喧嘩なんてありえない。心のどこかでそういう関係になりたいと思っていたが、夫にそれを求めるのは酷な気もした。誰か別の相手となら、そういう関係になれるのかもしれない.....。理恵と会うたび、依子はそう思うようになっていた。

夫と結婚したのは、東京の大学に出してもらったからであり、それも理恵が同じ大学の同じ学科へ行くと言ったからだった。両親は地元の短大へやり、卒業後は花嫁修業をさせるつもりだったが、理恵も依子もこの大学でなければいやだと言い張ったので、仕方なく東京へ出したのだった。

その代わり、卒業したら親の決めた人と結婚するのだと、依子は在学中から思っていた。だが大学時代の友人が次々と結婚していくにつれ、自分の結婚生活は果たしてこれでよいのだろうかと思うようになっていた。

理恵だけではない、佳恵だって、久美子だって、みんな幸せに暮らしているわ、なのに

どうして私は幸せと感じられないのかしら。依子は心の中に湧いてきた疑問に、答えを見出せずにいた。

そんなとき、大学から卒業十五年目の集まりを開くという案内が来た。

もう十五年、早いものね――そのとき、卒業前に告白を受けたことを思い出した。

彼の名前は、ええと確か.....原田、そう、原田俊彦君だったわ。

あまりお話をしたことはなかったけれど、彼は今どうしているかしら。

結婚して、幸せな家庭を築いているかしら。もしまだ独身だったら――

そう考えたとたん、自分にブレーキをかけた。

関係ないじゃない、私はもう結婚してるんだもの。でも、もし独身だったら――。

ダメ！ それ以上考えてはダメよ。

依子は必死で自分に言い聞かせたが、突如として自分の中に芽生えたその感情を、

どう扱ってよいか分からなかった。

その感情が依子の中で育つにつれ、俊彦の存在は次第に大きくなっていくのだった。

(3)

「原田さん、お疲れ様です。どうです、軽く飲みに行きませんか？」

オフィスを出る直前、俊彦は後輩の黒川隼人に声をかけられた。

「うん、あ、いや、やめておくよ。今日は早く帰らないと」

「そうなんですか。残念だな」と一応は了解した様子の黒川は、俊彦に並んで歩き出すと、言葉を続けた。

「そういえばこの前、高校の同期のやつらと飲んだんですけど、バブル時代の話になって、僕だけ全然ついていけなかったんですよ。そんなにいい時代だったんですか？」

「バブル？ 君も知らない年じゃないだろう。あ、君は向こうの大学を出て就職したんだったか。それで知らないんだな」

俊彦は外に出ると、初秋の冷たい空気にコートの襟を立てた。

「いい時代だったかと言われてもなあ、どうかな。就職には苦労しなかったが、少しは荒波にもまれたほうがよかったかと思うときもあるよ」

黒川は俊彦の隣を歩きながら話を聞いている。

「でも今じゃバブルの負の側面が強調されてるから、君の友達は飲み会のときくらいしか、当時を懐かしむようなことは言えないんじゃないか」

俊彦がそう言うと、黒川はうなずいて、

「なるほど、そうかもしれないですね」と言った。

「今度から嫌な顔しないで、話を聞いてやることにします」

そう言った黒川は、さわやかな笑顔をたたえていた。

俊彦は一瞬どきりとしたが、それを隠すように、

「ああ、それがいいだろう」と言った。駅に着くまでの間、二人は無言だった。

「じゃあ原田さん、僕はこっちなんで、ここで失礼します。どうも、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

黒川と別れた俊彦は電車に乗りこむと、空席がないのを見てため息をついた。仕方なく吊革につかまり、何を考えるともなく揺られていたが、ふと窓に映った自分の顔に愕然とした。

なんだ、このにやけた顔は――。

黒川と話したせいだと見当がついた。心なしか周囲の視線も冷たく感じられる。俊彦は窓を見ながらネクタイをなおし、白髪の目立つ髪をなでつけた。

あのころは、楽しい毎日がいつまでも続くと思っていた。いつからだろう、寝ても疲れが取れなくなったのは。それだけじゃない、仕事でも無理がきかなくなっている。学生時代には想像もしなかった体力の衰えだ。みんなそうなのだろうか。

川端さんも、あの頃と変わっているだろうか――。

(4)

「もしもし、依子？ 久しぶりね。元気？」

「理恵！ うん、元気よ。本当、久しぶりね！ ３年ぶり？」

「もうそんなになるかしら。実はダンナが東京に戻ることが決まったんだけど、まだ引継ぎで忙しいから、私だけ先に戻ってきたの。ねえ、遊びにこない？」

「行きたい！ でも今日はダメなの。来週なら行けると思うけど」

「じゃあ来週の火曜日でどう？ お菓子作って待ってるわよ」

「嬉しい！ 理恵のお菓子、本当に美味しいものね。じゃあ近くなったらまた電話するわね」

理恵は夫が九州に転勤になったので、この３年、一緒に九州で生活していた。九州行きを決めてから、仕事もすっぱり辞めた。かなり慰留されたらしいが、本人はいたって淡白で、どうせいつか辞めるつもりだったから、と言うのだった。何事も自分で決めている理恵が、依子にはまぶしく思えた。結婚するまでは親に従い、結婚してからは夫に従うものと思って生きてきたからだ。だが夫は、君の好きなようにしていいよ、というのが口癖だった。初めて言われたとき、意味が分からなかった。今でもよく分かっていない。

自分の好きにするというのはどういうことなのか、そもそも自分は何が好きなのか、依子は一度も考えたことがなかった。同窓会の話をしたときも、夫は、

「行きたいなら、行ってきたらいいよ。久しぶりに羽を伸ばしておいで」と言った。

それが依子には、夫が自分に無関心な証左と思えるのだった。

「ねえ理恵、どう思う？」

「どうって、何を？」

「だから、同窓会のこと、主人に言ったときの反応よ」

「いいだんな様じゃない！ うちのダンナだったら百くらい小言が返ってくるわよ！ でも日程を見たら彼がまだ帰ってないときなの！ だから思いっきり羽伸ばすわよ～。ね、依子も行くでしょ？」

「え、ええ.....」

「何よ、まだ迷ってるの？ いいじゃない、行っておいでって言われたんだし」

「そうなんだけど、でもね」

「でも、なに？」

「ちょっと、気になることがあるの」

「気になること？」

依子はうなずいた。

「覚えてる？ 原田俊彦君」

「原田君？ 彼がどうかしたの？」

「実はね、この前思い出したの、原田君に告白されたときのこと」

「あー、そんなこともあったわね。あれよ、若気の至りってやつよ」

(5)

もう理恵ったら、と依子は思い、ついに核心に触れた。

「ねえ、原田君に会ったら、どうなると思う？」

「会ったら、どうなる？」

理恵はオウム返しに言った。依子が何を言っているか、すぐには分からないようだった。

しばらくして、「まさか.....」とつぶやいた。

「ちょっと、あんたまさか、何か期待してるんじゃないでしょうね！」

違う、と依子は言おうとしたが、言葉は出て来ず、ただ口をぱくぱくさせた。

「そんなの昔のことじゃない！ 今とは全然違うわ。いったい何を言い出すの」

理恵のあまりの剣幕に何も言えず、依子はただ子どものように口をとがらせた。

理恵はため息をついた。

「何度も言うようだけど、あんたはご主人のありがたみが分かってない」

またはじまった.....。理恵のお説教はもううんざり！

依子は思い切って言った。

「だって、理恵のだんな様みたいに関心を示してくれないんだもの」

「関心って.....うちのはただうるさいだけよ！」

一瞬、二人のあいだに沈黙が訪れた。理恵はふう、と大きくため息をついて言った。

「大切なものは、目に見えない、か」

「何、それ？」

「うちのダンナが好きな小説の一節。星の王子さま、だったかな。いい年してメルヘンオヤジなの！」

メルヘンオヤジという言葉がおかしくて、依子はぷっと吹き出した。つられて理恵も笑ったが、すぐに真顔に戻り、依子を見つめて言った。

「あたしは本当にあなたを心配しているの。大切なのは今をどう生きるかなのよ」

今を、どう生きるか.....。理恵が真剣に自分を心配していることは、依子にも分かった。

でも.....今をどう生きたとしても、夫との溝を埋められるとは思えない。それが依子の結論だった。

「とにかく」と理恵は言った。

「同窓会には行きましょう、ね。久美子と佳恵も来るって言ってたから」

「うん.....」

「大丈夫。おしゃべりしたら気が紛れるわ」

依子はうなずいたが、内心、俊彦が来なければ行く意味はないと感じていた。

(6)

俊彦が目を覚ますと、隣に寝ていたはずのミチルがいない。時計を見るとまだ7時にもなっていない。ミチルのやつ、こんな早くからいったいどこへ行くんだ。俊彦は起き上

がり、居間へ向かった。するとミチルだけではなく、剛一も身支度をしていた。

俊彦は思わず、「どうした。どこへ行くんだ」と言った。その声に驚いたのか、ミチルは俊彦を睨んで言った。「おととい言ったじゃない、今日は模擬面接の説明会なの」

しまった、そうだったか。俊彦は頭をすくめた。だがミチルは剛一の世話に忙しい。俊彦は努めて平静に、言葉を続けた。

「説明会？ たかが予行演習に随分と念を入れるんだな」
「やめてよ、そんな言い方。予行演習は重要なのよ。雰囲気に呑まれないよう訓練するんだから。その成果を最大限に引き出すための説明会なんですって」

俊彦は色々言いたいことがあったが、身支度を始めることにした。鬚をそり、歯を磨き、ワイシャツを着てネクタイをしめる。剛一の身支度を整え、一緒に持ち物を確認しながらミチルが言った。

「そういうわけだから、朝ごはんは一人で食べてね。冷蔵庫にサンドイッチがあるわ」
「俺も一緒に出るよ。会議の資料、まだ読んでないんだ」

俊彦はコートを羽織ると冷蔵庫から皿を取り出し、サンドイッチをラップごと包んでポケットに入れた。

「お皿は台所に出しておいてね」

「ん？ あ、ああ」

あわてて皿を台所の流しに置くと、俊彦は二人と連れ立って家を出た。

「いつもの駅でいいんだろう？」

「ええ」

「じゃあ三人で行こう。たまにはいいだろう」

ミチルは苦笑いとも微笑みともつかない表情を浮かべ、

「そうね」と言った。

それにしても、と俊彦は剛一に目をやった。時折スキップしながら、弾むように歩いている。

「剛一のやつ、ずいぶん嬉しそうだな。説明会がそんなに楽しみなのか？」

ミチルはあきれたように言った。

「そんなわけないでしょう。剛一はね、あなたが一緒だから嬉しいのよ」

「俺が一緒だから？」

「そう。だって、あなた剛一と一緒に出ることなんてないじゃない。子供っていうのはね、そういう何気ないことを喜ぶものなの」

「そういうもんかな」

「そうよ」

ミチルに断言され、さて何を言ったものかと考えていると、剛一が話しかけてきた。

(7)

「ねえお父さん、これ知ってる？」「ん？ なんだ？」

「本当に大切なものは目に見えない、っていうの。なんだか分かる？」

「本当に大切なもの？ 目に見えないって？」とオウム返しのように言って、俊彦は考えた。

「あれだ。ええとたしか、星の王子さまだ。違うか？」

「正解！ お父さんすごい、よく知ってるね」

「まあな。これでも昔は文学少年だったんだ」「へえ～」

剛一にすごいと言われ思わず相好を崩した俊彦は、ミチルに尋ねた。

「俺が知ったのは中学のころだったが、最近の小学校はもうそんなことを教えているのか」

「学校じゃないの、塾なのよ。心の教育がなんとかって、面接でも聞かれるんですって」

なんだ、受験なのか。俊彦は苦虫をかみつぶしたような、なんともいえない表情になった。

子供が文学に興味を持ってくれるのは嬉しいが、そのきっかけが受験というのはあまりにさびしすぎる。そう言いたげな表情だった。

その夜、俊彦は久しぶりに夢を見た。『星の王子さま』に出てくる王子さまと会話をしている。本当に大切なものは目に見えないんだ、そう言われたとき、王子さまが女性に変わり、俊彦は驚いた。依子だった。しかも学生時代とまったく変わらない。

呆気にとられる俊彦に、依子は言った。あなたの大切なものは何ですか？ 俊彦が考えていると、答えを促すように、あらゆる方向から声が聞こえてくる。あなたの大切なものは、何ですか.....。その声にはエコーがかかっていた。

突然、依子はミチルになり、俊彦を問いつめた。あなた、大切なものはあたしって、なぜ言ってくれないの？ あなたの大切なものはあたしでしょう？ あなたのあなたの―大切な大切な―ものはものは.....

「やめてくれーっ！」俊彦は思わず大声をあげた。

「あなた、どうしたの？ 大丈夫？」

やめてくれ、ミチル、やめてくれないか。

「一体どうしたっていうの！？ あなた変よ！」

その強い口調で目が覚めた俊彦は、そこが自宅の寝室であることに気づき、ふうっと安堵のため息をついた。

「ひどくうなされてたわ。汗びっしょりじゃない」そう言われ初めて、自分がひどく汗をかいていることを知った。「それにお化けでも見たような顔してる。顔洗ったら？」お化け、そうだな。あんなの、化け物以外にありえない。

着替えて洗面台へ向かう俊彦の背中から、ミチルが言う。

「あたしはもう少し寝かせてもらいます。睡眠不足はお肌の大敵なんですから！」

ああ、構わないさ。お前がいつまで寝てたって世の中変わりはしない。心の中で悪態をつくと、俊彦は自分に喝を入れるように、冷たい水で顔を洗った。

(8)

「じゃあ行ってくるよ」同窓会当日、依子は朝早く出かける夫を送り出していた。

「夕飯は済ませてくるから心配しなくていい。大学の友達とゆっくりしておいで」

「はい」そう言いながら、依子は一抹の寂しさを覚えていた。

やはりこの人は、私のことを気にかけてはくれないのだわ。気にしていたら、早く帰ってこいとか何とか、言って当然じゃなくて？ 夫を送り出し、玄関先の時計を見て、依子はため息をついた。パーティーまで４時間もあるわ。どうしよう.....。ふと、依子は理恵の言葉を思い出した。本当に大切なものは目に見えない、か.....。

その時、電話が鳴った。

「もしもし、依子？ 今から出て来られる？」理恵だった。

「え？ 何、どうしたの？」

「今日の式典で花束を受け取るはずだった人が、急用で来られなくなったの。代わりに受け取ってもらえないかしら？」

「え、なんで私なの？」

「あなたがいいって、みんなが言うのよ」

事情はよく分からなかったが、依子は依頼を受けることにした。

「分かったわ。何時にどこへ行けばいい？」

「講堂分かるわよね？ そこに、10 時ごろに来てくれる？」

もう一度時計を見る。10 時なら、今から支度して出れば間に合う。

「10 時に講堂ね、分かったわ。じゃあ後でね」

最寄り駅に着くと、依子は料金表を見上げた。最近はタッチ式の IC カードが全盛だが、やはり切符を買って乗る方が、風情があると思っていた。券売機の列に並び、ふと脇に目をやると、点字の表示が目に入った。

そうそう、新聞の折り込みに点字通信講座のチラシが入っていたわ。伯父さんも緑内障とかで視力が衰えてるって言ってたけど、点字を覚えたら役に立てるかしら――。などと考えているうち順番が回ってきたので、依子は切符を買ったあと点字表示に近づき、時折手で触れながら熱心に見始めた。しばらくして後ろからポンポンと肩を叩く人があり、依子は振り返ったが、見知った人には思えない。訝しげな依子にその人は言った。「お手伝いしましょうか？ どちらまで行かれるんですか？」

どうやら視覚障害者と間違えられたらしい。依子は真っ赤になって、

「大丈夫です、すみません！」と言うと、逃げるように改札を通ってホームへ急いだ。

(9)

同窓会当日、俊彦は模擬面接に出かける剛一とミチルを朝早く送り出すと、大学生のころ読んだ小説を取り出した。当時読んだのは 8 歳上の兄に借りたハードカバーだったが、この日手にしていたのは昨日古本市で見つけた文庫本だった。この小説は、作者の意図に反して売れたんだ。兄はそう言っていつもの文学談義を始めた。

「世間のやつらはこれが恋愛小説だと言っているが、そんな莫迦な話があるものか。これは生と死を正面から捉えた作品だ。お前もそう思うだろう、俊彦？」

俊彦も読みはしたものの、よく理解できなかった。曖昧に返事をすると、兄は得意になって自説を披露するのだった。

「要するに、生者が死者を悼むかぎり、死者は生き続けるんだ。この小説でも、主人公と親友の恋人、その恋人が死んだ後は彼女の友人と、主人公は関係を持つ。それは恋愛なんかじゃない。彼らは死者の存在を確かめるために交わるんだよ。交わっているかぎり、死者はそこにいるからだ」

同じタイトルの曲が昔あっただろうか。心なしか、もの悲しいメロディだったように思う。

そんなことを考えながらゆっくりとページをめくる。正直、今でもよく分からないなぁ。

俊彦はあらためて兄の偉大さを思った。小さい頃から何かにつけ兄と比較されてきたが、不思議と嫌ではなかった。子供心にも、兄はすごい人だと思っていたのだ。その兄が 3 年前、交通事故で亡くなり、すっかりふさぎこんでしまった父は、後を追うようにその翌年に亡くなった。

結局俺は兄貴の代わりにはなれなかった。母は父の死後、兄の幻影にとらわれ続けた俊彦をいたわるように、これからはあんたの人生を歩みなさい、と言った。

だが俊彦にとって人生とは兄がいてこそのものだった。兄がいなくなった今、自分はどう生きていけばいいのか、俊彦にはまだ分からない。しかしこうして兄のことを思っていれば、兄が存在していると感じるのも確かだった。兄が言っていたように、生きている者が死んだ者を悼むかぎり死者は生き続けるのであれば、兄は今でもどこかに存在しているに違いないのだ。

ふと時計を見てもう 9 時を回ろうとしていることに気づき、俊彦はあわてて身支度を始めた。今日は 9 時半からミサだったな。在学中は一度も出席しなかったが、せっかくだから出ることにしよう。山岡や小西も来ると言っていたし――。

二人は学生時代、俊彦が常に行動を共にしていた同級生だ。卒業後もしばらくは会っていたが、互いに結婚して子供ができると疎遠になってしまい、会うのは実に 10 年ぶりだった。俊彦は駅へ向かいながら、学生時代のことを思い出していた。

(10)

大学時代、俊彦には「トシちゃん」というあだ名があった。最初に言い出したのは、理恵だった。入学早々行なわれたオリエンテーションで組分けがあり、小西、山岡、俊彦、それに理恵と依子が同組になった。理恵はみんなにあだ名をつけると言い、各人の下の名前をうまくアレンジして、次々あだ名で呼んでいった。最後が俊彦だった。
俊彦さん、俊彦くん、俊彦ちゃん.....理恵はつぶやきながら少し考え、そうだ、と顔を輝かせた。
「トシちゃんがいいわ！」と理恵が叫び、山岡も小西も噴き出した。そりゃあいい、ぴったりだ、と二人が言う中、ひとり憮然とする俊彦に理恵は言った。
「だって考えてみてよ。トシさんじゃおじさん臭いし、トシくんじゃ子どもみたいでしょう？」
「だからって——」
口をとがらせる俊彦に、
「いいじゃない。これで女子の人気も上がるわよ」と理恵は言った。
女子の人気が上がる？ 本当に？
俊彦は理恵のうしろにいる依子に視線を向けた。その瞬間、目と目が合い、依子が怪訝そうな顔をする。俊彦はあわてて目をそらした。気づかれただろうか.....。その後も俊彦は、ちらちらと依子の様子をうかがった。依子はといえば、俊彦を気にする様子はまったくない。ショックを感じながら、もし本当に人気が上がるなら、彼女に近づくチャンスが増えるかもしれないと、俊彦は思った。それで、意に沿わないあだ名も受け入れようと決めたのだった。

でもなあ、さっぱりだったなあ。
駅に着いて、改札にＩＣカードをタッチしながら、俊彦は思った。結局、松平さんに一杯食わされたのかもな。単に俺を「トシちゃん」と呼びたかっただけなんだ。もっともらしい理由を言われたもんだから、それもいいかと思ってしまった。運のつきだな。まあでも、山岡と小西という友達もできたことだし、プラマイゼロかな。
ちょうどそこへ、電車が入って来た。大学の最寄り駅へ、乗換なしで行ける電車だ。

そういえば、川端さんに告白すると言ったとき、山岡はがんばれ、って言ってくれたんだっけか。駄目だったよと言いに行ったら、小西も一緒で、まあ気にするな、という口ぶりだったが、よく考えたら変な話だよな。まるで俺が失敗すると分かっていたみたいだ。いやしかし、いくらなんでもあいつらが予知能力を持っているわけはない。考えす

ぎだな——。

俊彦は電車に乗り込み、ドアに近い座席に腰をおろした。大学までは 5 駅ほどで決して遠いわけではないが、最近は短距離でもやけに座りたくなる。学生時代は実家から 1 時間半かけて通っていたが、行きも帰りもほとんど座ったことがなかった。

俺も年だな。俊彦はあらためてそう思った。

(11)

俊彦は電車を降り、懐かしいキャンパスのほうへ歩いていった。キャンパスの場所は変わっていないが、在学中になじんだ風景とはまったく違う。一瞬違和感を覚え、次の瞬間、卒業してからの月日を思った。もう 15 年だもんな、景色も変わるよな.....。感慨にふけりながら歩いていると、途中で小西に会った。

「ようトシちゃん、元気そうだな」小西は嬉しそうに話しかけてくる。

この年になってトシちゃんはないだろう、と俊彦は思ったが、久しぶりの再会に顔がほころぶ。

「お前も元気そうじゃないか」

10 年ぶりにしてはやや素っ気ない挨拶を交わし、お互いの近況を報告し合うと、小西が言った。

「知ってるか？ 今日の式典、ステージに上がって花束を受け取るのは川端さんらしいぞ」

川端さん、という名前を聞いて、俊彦は胸がざわめくのを感じた。

つとめて冷静に「そうか」と言ったが、口から出た声を聞いてパニックしそうになった。なんで俺はこんなに声が裏返ってるんだ！？

「山岡が実行委員をやっているんで聞いたんだが、なんでも急に決まったらしい。もともと予定していた人が、来られなくなったんだそうだ」

幸い、小西は気づいていない。俊彦はなるべく音を立てないように、2、3 回深呼吸をした。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

依子は 9 時 45 分に講堂に着いていた。休日のせいか、学生の姿はまばらだった。式典があるとはいえ、出席者は多くないのかもしれない、と依子は思った。パーティーは午後からだものね。今から来る人は、そんなにいないのかも。

依子は思いっきり息を吸い込むと、はあー、と大きく息を吐き出した。大学に来たの、何年振りだろう。懐かしいな。講堂の向かいの図書館を眺めながら、依子は学生時代を思い出していた。

私はいつも、図書館の会議室を予約する係だった。理恵に佳恵に久美子、それに私の 4 人で、毎回おしゃべりしてたのよね。本当は勉強とか、「有意義な」目的にしか使っちゃいけなかったみたいだけど.....。いつだったか私がそう言ったら、おしゃべりだって有意義な活動よ！ なんて、理恵に言われたっけ。

あの頃は大学を出て、お父さんの決めた人と結婚するのが当然だと思ってた。でも人生って色々あるのよね。選択肢はひとつじゃないって、最近実感するわ。幸せも、ひとつじゃない。大学を出て結婚すれば、幸せになれると思ってたけど――。

依子はため息をついた。若いときにもっと、いろいろ経験しておけばよかった.....。

「あーあ、もっと遊んでから結婚したかったなあ」

思わず口をついて出た言葉に自分でも驚きながら、依子はあわてて周囲を見回した。見える範囲に人の姿はない。ホッと安堵のため息をつくと、後ろから声をかけられた。

(12)

「遊びたかったなんて物騒なこと言ってるのはだあれ？」

驚いて振り向くと、理恵がニコニコしながら立っている。

「理恵！ もう、おどかさないでよ！」

「あら、おどかしてなんていないわよ。依子が勝手におどかされてるんじゃない」

「もう、屁理屈言わないで！」

思わずふくれっつらになる。理恵はうふふ、と笑って言った。

「案外早かったじゃない、依子。遅れてくるかと思ったわ」

その言葉に、依子はまた気分を害した。

「失礼しちゃうわね。私だっていつまでも遅刻クイーンじゃありませんから」

そこへ割って入る声があった。

「誰が遅刻クイーンだって？」

先ほど、俊彦と小西のあいだで話題にのぼった山岡だった。

「依子、山岡くん覚えてるわよね？」

理恵に問われ、曖昧にうなずく依子。

「光栄だなあ」山岡は嬉しそうに言った。

「学生時代、川端さんはマドンナだったからね」

そう言うと、依子にうやうやしくお辞儀をしてみせた。

「覚えていただけているとは、大変光栄です」

「やあね、山岡くんったら」

理恵が笑いながら言う。依子もほほ笑みながら、ふと、山岡と俊彦が一緒にいたことを思い出した。その瞬間、顔にほてりを感じ、あっという間に身体全体が熱くなる。私っ

たら、一体どうしちゃったのかしら？

「依子、どうしたの？ 熱でもあるの？」

理恵の問いかけにも、下を向いたまま首を横に振るのがやっとだった。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

式典は、旧友たちと近況報告をし合うざわめきの中で始まった。俊彦も例に漏れず、かつての同級生たちと名刺を交換している。座席に座ったままなので不自由な体勢だが、間に座った者を介し、名刺があちこちに渡っていく。階段状になった講堂の座席から、感嘆の叫びが上がった。

「うわ、すげえ！ トシちゃんがこんないいとこに勤めてるなんて知らなかったよ」

すかさず小西が茶々を入れる。

「岸本が知らないのは当然だろ。ずっと音信不通だったじゃないか」

岸本は照れくさそうに「まあな」と答え、話題を変えた。

(13)

「山岡が実行委員やってるんだって？ しかも川端さんと一緒に。よかったよなあ」

「よかった？ どうして？」

別の同級生が尋ねる。俊彦も気になり、岸本の言葉に耳をすませた。

「入学早々、あいつ川端さんに告白しただろ。卒業したら田舎に帰って親の決めた相手と結婚するんだって言われて、やけになってさ。毎日のように飲みに付き合わされたぜ」

「へえ、そうなんだ」

「ああ。俺の川端さんを返せ、とか大声で叫んでな。誰がお前のだよ、って思ったけど、今こうして一緒にやれて、満足してるんじゃないか？」

ひとしきり話し終わった岸本は、ようやく小西の気まずそうな顔に気づいた。

「小西、どうした？ なんでそんな顔してるんだ？」

小西の視線の先に目をやると、青ざめた俊彦がいた。そこではじめてまずいことを言ったと気づいた様子で、岸本は小西に向かって、スマン、という手振りをしてみせた。

俊彦はたった今聞いた話を思い返した。自分が告白したときの、山岡の様子が腑に落ちた。そうだったのか、だからあいつ――。ふつふつと、怒りにも似た思いが込み上げてくる。

でもそんなこと――自分が告白して駄目だったなんて、そんなこと一言も言わなかったじゃないか！ 裏切られた気持ちになり、俊彦は小西に言った。

「山岡のやつ、水くさいじゃないか。小西、お前も知ってたんだろう？」

「ああ、知ってたさ。でもお前には言うなって言われたんだよ」

「なんでだよ、友達じゃなかったのかよ」

俊彦にそう言われ、小西は思わず言い返した。

「じゃあ聞くがな、もし本当のこと言ってたら、お前どうした？ 何も言わないで卒業したか？」

たしかに――。俊彦は言葉を失い、青ざめた顔のままうつむいた。

もし本当のことを言われていても、自分は大丈夫と高をくくっただろう。俺は違うと思ったはずだ。それで断られる方が、何倍も惨めだったに違いない……。

俊彦は急に自分が恥ずかしくなった。同時に、今までいかに周りのことを考えず、がむしゃらに突っ走ってきたかを思い知った。

兄貴にもよく言われたな。お前は突っ走りすぎだって。若いうちはいいが年を取ったら周りも見ろと、そう言われたっけ……。

やっぱり、兄貴には敵わないや。俊彦は天井を見上げ、その拍子にフッと笑いが漏れた。晴々とした顔だった。

俊彦のすっきりした表情を見て、岸本も小西もホッと胸をなでおろした。壇上では同期の中から選ばれた、代表者の演説が始まったところだった。

(14)

「準備はいい？ もうすぐ出番よ」

舞台袖で理恵に言われ、依子は緊張が高まるのを感じた。どくん、という鼓動が頭の中に響く。まるで心臓が耳のすぐ近くにあるようだ。

どうしよう……。依子は立ったまま下を向き、左手をぎゅっとこぶし状に握る。そのこぶしを右手のひらで包むと、自分の手をじっと見つめた。

山岡と理恵は、壇上にいる演説者の話題で盛り上がっていた。

「今はお父さんの会社を継いでるそうだけど、昔はラジオ DJ で活躍してたんだって？」

「そうなの。人気あったわよ〜。事業も成功してるなんてホント尊敬しちゃう」

「おまけにあんな美人だなんて、天は二物、いや三物を与えたもうたか！」

山岡が叫ぶと、理恵は言った。

「それは聞き捨てならないわ」

「聞き捨てならない？」

「そうよ。天からの贈り物だけで人生が成り立つわけじゃないもの」

「ほう。じゃあ何がある？」

「才能とか美貌とか、天賦のものは１％なのよ。天才だって 99 ％の努力が必要なんだから」

「なるほど、彼女は努力してないと言わんばかりじゃないかと、そう言いたいんだね」

「ええ」

「これは大変失礼いたしました」

山岡は依子にしたように、またお辞儀をしてみせた。

「分かればいいのよ、分かれば」

理恵はそう言うと、ぷっと噴き出した。

「何やってるのかしらね、いい年して」

山岡も笑顔になり、懐かしそうに言った。

「松平さん、全然変わってないね。昔のままだ」

「まあ、誉めたって何も出ないわよ」

そういうつもりじゃ、と否定しながらも、山岡は笑顔を崩さない。

そんな山岡に理恵は言った。

「山岡くん、政治家に向いてるんじゃない？ 人の心を掴むのが上手いもの」

「俺なんか無理だって。政治家向きじゃないし」

「なーんて言いながら、実は狙ってるんでしょ」

理恵は笑みを浮かべながら、山岡に詰め寄る。

「正直に言いなさい。言わないと投票してあげないわよ」

「まいったな、ははは」

(15)

舞台袖の依子は二人の話を聞きながら、理恵に脱帽していた。こんなにリズムよく会話するなんて、私には無理だわ.....。理恵って本当にすごい。専業主婦なんて勿体ないと思うけど。理恵ならきっと、世の中でもっと活躍できるはずだわ。

そう考えて、かつて理恵に言われたことを思い出した。

「家事が好きだからやってるの。家にいるのが勿体ないなんて、思ったことないわ。私は好きなことをしてるだけ」

なんとなく釈然としない思いを抱いていると、また理恵が言った。

「それにね、食事を作るのは高尚なことなの。お寺でも、食事を作るのがもっともレベルの高い修行なんですって。だからうちではあたしがいちばん偉いのよ」

最後の言葉に、依子は思わずぷっと噴き出した。それを見て、理恵もうふふ、と笑う。笑いながらも依子は刺激を受けていた。家事を高尚なものと位置づける理恵の発想は、新鮮な驚きだった。依子も家事を修行、つまり自分を高めるものと考えて、今までとは取り組み方を変えている。そのおかげで単調な作業としか思えなかった家事に、新たな意味を見出すことができるようになっていた。

全部理恵のおかげ。依子はそうつぶやいて、これまでのことを思い返した。中学で知り合って、高校で親友になった。この大学へ来られたのも理恵のおかげ。原田くんと知り合えたのも――その瞬間、依子はまた顔のほてりを感じ、身体じゅうが熱くなった。その熱をさまそうと深呼吸をしていたら、理恵に声をかけられた。

「依子、呼ばれたわよ」

ハッとして我に返り、あわてて壇上へ出て行った依子は、痛いほどの視線を感じた。出席者の間から話し声が聞こえる。自分の緊張を話題にしているのではないか、依子にはそう思えてならなかった。実際は昔話が大半だったが、依子に注目している出席者もい

た。俊彦と、小西、それに岸本である。

「川端さんだ」

誰が言うともなく檀上に目を向けた三人は、いかにも緊張した様子で出てくる依子を見て、同じように緊張を感じていた。俊彦は依子の姿に、15 年前と変わらぬ輝きを見た。そしてそのことに安堵を覚えていた。ずっとこうして見ていたい――。俊彦は固唾を呑んで依子の一挙手一投足を見守り、無事に花束を受け取って、舞台袖に戻ることだけを祈っていた。まるで父親だな、と思わず苦笑したが、依子の緊張はそれほどに明らかだった。

依子が花束を受け取って一礼し、舞台袖に戻ると、俊彦はふうーっと大きなため息をついた。小西を見ると、やはりホッとした顔になっている。続いて山岡が舞台袖から現れ、卒業 15 周年記念の祝状を同期生代表で受け取った。

(16)

依子はといえば、終わった途端に力が抜けて放心状態になっていた。反対側の舞台袖に消えるはずだったのが、出てきた側に戻ってきてしまったのだが、とにかく終わったという、それだけを喜んでいた。だから理恵と山岡が困った顔をしているのも気にならなかった。

すぐに山岡が出て行き、祝状の束を抱えて戻って来た。その束を見て、依子はこの後の予定に支障が出ることに気づき、一転して落ち込んだ気分になった。

受付に入るため、早めにパーティー会場へ行かなければならないのだが、移動するには反対側へ行かなければならない。舞台上を横切るか、広く薄暗い講堂の中を歩くか、二つに一つだ。受付開始時刻が迫っている。講堂の中を移動していては間に合わない。しかし舞台を横切れば、式典の進行に支障が出てしまう。ちょうどそのとき、卒業 25 周年を迎えた卒業生の、代表挨拶が行なわれているところだった。一体どうしたらいいのか。依子は情けなくて涙が溢れそうになった。

そんなとき、いつも理恵が助け舟を出してくれる。

「うん、そう。悪いけどお願いね」

誰かに携帯電話で連絡をとっていた理恵は、いつもの調子で依子に言った。

「今、久美子と佳恵に頼んだから、ここにいても大丈夫よ。あとから行けばいいわ」

状況がよくのみこめない依子は、オウム返しに尋ねた。

「久美子と、佳恵に？ 頼んだ？」

「そうよ。だからここにいても大丈夫なの。式典が終わるころ、受付に行けばいいわ」

その言葉に山岡も安心した様子で、「川端さん、大丈夫だよ」と声をかける。

依子は事態を理解したのか、うん、うん、とうなずき、同時に涙をこぼし始めた。

「どうして泣くのよ。大丈夫だって言ってるのに」

「嬉しいのよ。嬉しくて涙が出てきちゃうの」

しゃくりあげるたび揺れる依子の肩を、理恵はしっかりと抱いて言った。

「ほら、笑顔を見せてちょうだい」

真っ赤な目でこくりとうなずき、ほほ笑みを見せる依子。

「涙をふいて。依子の泣いた顔なんて、見られたもんじゃないわ」

「何よ、それ。ちょっとひどいんじゃない？」

依子が頬をふくらませて抗議すると、理恵は笑って言った。

「そう、その顔よ。ようやくいつもの依子に戻ったわね」

「もう、理恵ったら！」

そう言いながらも、依子は理恵と山岡と交互に顔を見合わせ、うふふ、と幸せそうに笑った。

(17)

「理恵、何だって？」

パーティー会場の受付で、佳恵が久美子に尋ねた。

「依子が遅れるから、しばらく頼むって」

「大丈夫かしら」

「大丈夫よ、私たちで何とかしましょう」

「そうじゃなくて.....」

「依子のこと？」

佳恵はうなずいた。

「そうね.....」

久美子が思案顔になる。

「大丈夫じゃない？ 理恵が一緒だもの」

「そうね」

佳恵はホッとしたようにうなずいた。

パーティー会場では、俊彦が小西と並んで受付の順番を待っていた。式典が終わる前に出てきたつもりだったが、会場前には長蛇の列ができていた。ふと耳にした会話から、式典には出席せず、パーティーのために出てきた人間も多いと分かった。道理で、と俊彦は思った。式典会場から出てきたにしては、人が多いと思ったのだ。

「川端さんは全然変わっていなかったな」小西が言い、俊彦はうなずいた。

「ああ。まるで俺だけ、年を取ったみたいだった」

依子の姿を思い出す。ついさっき見た依子の後ろ姿に、十五年前の姿が重なった。

依子と理恵がパーティー会場に着いたとき、受付はすでに人でごった返していた。どこからもぐりこめばいいか考えていると、二人を目ざとく見つけた久美子が叫んだ。

「来た来た。こんな時まで遅刻してくるなんて、さすがクイーンだわ」

依子は久美子に向かってちょっと怒った素振りをしたが、俊彦が受付に並んでいるのを見て、緊張で体がこわばった。そんな様子を察したのか、理恵が後ろから言った。

「久美子の隣に入るわよ」

前を向いたまま軽くうなずくと、依子は人波を縫うように移動して、受付に入った。

俊彦がふと受付に目をやると、ちょうど依子が入っていくのが見えた。その瞬間、心臓が高鳴り、顔がほてるのを感じた。一体どうしたというんだ、俺は――。ほてりを振り払おうとするように、俊彦は左右に勢いよく顔を振った。再び受付に顔を向けると、依子が困った顔をしているのが見えた。どうやら受付でごねている奴がいるらしい。俊彦は不安になったが、隣にいた理恵が助け舟を出したようだ。依子のホッとした顔を見て、俊彦も安堵した。

(18)

「ありがとうございます。3000 円お預かりします。500 円おつりです」

久美子がおつりを渡し、依子は名札を差し出した。この人は当日参加だから、名札にお名前を書いてもらわなくちゃ――。

「すみません、名札をご記入いただけますか？」

名札を見せられた男は、怪訝そうな顔をした。

「なんで名札書かなきゃいけないんだ？」

「え？」

突然投げかけられた質問に、依子は戸惑った。

「すみません、おっしゃっている意味がよく分からないんですが.....」

男が口を開こうとしたとき、理恵が助け船を出す。

「当日参加の方は事前申込の方と違って名札のご用意がないんです。十五年ぶりですし、皆さんとお話しになるときにお互いお名前が分かるほうがよろしいんじゃありません？」

その言葉に納得した男は名札を受け取り、パーティー会場へ入っていった。

「助かったわ、理恵。ありがとう」

理恵は依子に小さくウインクしてみせた。

人の波は絶えることがなく、参加者が次々に訪れる。昨日までは大勢来てくださるかしら、なんて心配していたけど、杞憂に終わってよかったわ。そんなことを考えながら、依子は同期生から会費を受け取っていく。

「次にお並びの方、どうぞ」現れたのは俊彦だった。依子は一瞬凍りついたようになったが、すぐに笑顔を見せた。

「お久しぶり」

俊彦も笑顔で応じる。

「やあ、久しぶり」

そして、先ほどの懸念を口にした。

「さっきは困ってたようだけど、大丈夫？」

「え、ええ。理恵に助けてもらったから」

「そうか。ならよかった」

「心配かけてごめんなさい」

「いや、いいんだよ」

名札に名前を書き込むと、俊彦は依子にマジックを返した。

「それじゃあ」

「ええ」

マジックを受け取る瞬間、手が触れそうになり、依子は息が止まりそうになった。でも俊彦に気づかれないよう、必死で自分を抑えていた。

(19)

俊彦は名残り惜しそうに依子の顔を見ていたが、隣で受付を済ませた小西に促され、会場に入っていった。動悸がようやくおさまり、俊彦の後ろ姿を見送る依子だったが、理恵に「次の方お願い」といわれ、受付の仕事に戻る。

「当日参加の方ですね。こちらへどうぞ」

俊彦はたった今通り過ぎたばかりの受付を振り返った。依子はすでに受付の顔に戻っている。でもあの笑顔は、俺だけに見せたんだよな――。依子の微笑みを思い出し、満足げにひとりごちた。

「なんだ、お前らもう来てたのか！」

小西の声で向き直ると、懐かしい面々が俊彦を取り囲んでいた。

「おお、久しぶりだなあ！ みんな元気だったか？」

＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

「これより卒業 15 周年記念のパーティーを始めます」

会場内では「乾杯」の声があちこちから聞こえていたが、理恵と依子はまだ受付にいた。人の波が途切れたとき、理恵は依子に尋ねた。

「さっき原田くんと何を話していたの？」

「別に。ただ、さっきは大丈夫だったかって。ほら、理恵が助け舟出してくれた人のこと」
「ああ、あの人ね。それでなんて言ったの？」

「理恵に助けてもらったから大丈夫って言って、心配かけてごめんなさいって」

「そう」

理恵がさらに言葉を続けようとしたとき、受付に人が訪れた。しばらくして理恵がまた口を開いた。

「さっきの話だけど、それで原田くんはなんて言ったの？」

「うーん、いいよ、って言ったかしら。とにかく、マジック渡して、返してもらって.....」
俊彦と手が触れそうになり動悸がしたことも思い出したが、それは伏せることにした。

「そのあと、原田くんは.....それじゃあって言って、会場に入っていったわ。それがどうかしたの？」

「ううん、なんでもないの。ただ、何を話したのかな、と思って」

「そう」

理恵は自分と俊彦のことを気にしているのだと分かったが、依子にはそれが疎ましかった。私だって分かってるわ、子供じゃないんですもの。

だが依子は分かっていなかった。依子が外出するとき、夫は必ず早く帰宅して依子の帰りを待っていることを。だからこそ理恵が、俊彦とのことを心配しているのだということを。

(20)

理恵がそのことを知ったのは、まったくの偶然だった。依子との待ち合わせに遅れそうになり、間違って家にかけてしまったとき、依子の夫が電話に出て理恵は驚いた。帰りが遅くなるから自分のことは心配しなくていい、と夫はいつも言うのだと依子から聞かされていたからだ。

理恵がそのことに触れると、依子から連絡があったときに助けになれるよう、早めに帰宅するようにしていると夫は言った。同時に、依子には言わないでくれとも言った。依子がそれを知ったら子供扱いされているように感じるだろうから、と。たしかに、と理恵は思った。ご主人がいつもそうしていると知ったら、依子は怒ってへそを曲げるに違いない。了解して電話を切り、依子に会ったときも何も言わなかった。

だがそれ以来、理恵は依子が夫の愚痴を言うたび、あなたは分かっていないだけなのよ、と諭すようになった。

依子の隣で、理恵は当時のことを思い出していた。依子は分かっていないのよ、ご主人からどんなに愛されているか。ご主人だけじゃないわ、私も佳恵も久美子も、みんな依子の笑顔を見たい、そう願っているのに――。

俊彦たちは司会者が話している最中も、ずっと話をしていた。

「川端さんが 15 歳上の旦那と結婚したよりも、俺は松平さんのほうがショックだったな」

旧友の一人が言う。

「なんでだよ？」俊彦はすかさず問いただした。

「だってさ、松平さんの旦那は 10 歳上だぜ。絶対年下と結婚すると思ってたんだ。なんたって後輩の面倒見がよかったしな。それが 10 歳上と来りゃあ、誰だって驚くだろう」

「いや、俺は驚かなかった」そう言ったのは小西だった。

「俺の叔父夫婦が理恵ちゃんの親代わりでさ。理恵ちゃん、早くに両親をなくして、甘えたい盛りの頃に弟や妹の面倒見てたって、よく聞かされたんだ」

理恵ちゃん、と小西が親しげに呼ぶのを聞き、旧友たちは驚いた様子だった。俊彦も驚いたが、それは理恵が早くに両親をなくしていたことに対してだった。

「だから、甘えられる人を選んだんじゃないかな。まあ本当のところは分からないけど」

「そうだったのか。人間、色々あるもんだな」

理恵の結婚に驚いたと言った同期生は、しみじみと感慨をもらした。

(21)

彼 女、まったくそんな風には見えなかったな.....。久しぶりの同窓会で理恵の知られざる一面を知り、俊彦も感慨にふけっていた。小西の叔父夫婦が親代わりだったのだって、東京に出てくる際、近くに知り合いがいるほうがいいからとしか思っていなかった。そんなことがあったなんて.....。ずっと前から知っているようでも、何かしら発見があるもんだな。来てよかった――。

ふいに目の端で、誰かが自分のほうに倒れかかってくるのが見えた。

「危ない！」叫び声が上がった瞬間、俊彦はその人物を両手で受け止め、抱き起こした。顔を見て、俊彦は動転した。

「川端さん！ 大丈夫？」

「あ、え、ええ、大丈夫。ごめんなさい――」

依子はまた動悸が激しくなっていた。しかも今度は、俊彦の手が肩に触れている。動悸がしているのを、知られてしまったかもしれない。そう思うと居たたまれなくて、思わずうつむいた。

受付から理恵の声が飛ぶ。

「依子！ 急いで！」

「あ、うん！ ごめんなさい、行かなくちゃ。先生が、閉会のあいさつを.....」

俊彦はあわてて手を離す。何と言っていいか分からなかった。

「気をつけて」

かろうじてそれだけを言うと、依子の唇に目が行った。真一文字に結ばれた唇が、一瞬、弧を描いたようになった。

「ありがとう――」

依子は俊彦の顔を正視できなかった。突然のことに動転していた。笑顔はつくったつもりだが、もしかしたら、ひきつっていたかもしれない.....。恥ずかしさで体じゅうが熱くなり、受付に戻ってからも顔がほてっていた。

理恵が言う。

「依子、しっかりしてよ。何もないところでつまづかないで」

「ごめんなさい。でも先生のこと、ちゃんと司会の人に知らせてきたわ」

「ご苦労様」

二人は顔を見合わせて、ホッとしたように笑った。

(22)

パーティーは盛況だった。広い会場は人で一杯になり、あちこちから歓声が上がっていた。間もなく閉会となります、と司会が言い、しばらくして、〇〇先生にご挨拶を頂戴します、と声がした。

「さっきはすまん」

岸本は俊彦に言い、酒を注いだ。

「気にするな」

俊彦は岸本に返杯し、近況を話し合った。

「山岡のやつ、いまだに独身だって聞いたからさ」

岸本がつまみを食べながら言う。

「てっきり、川端さんのことが忘れられないんだと思って」

なるほど、そういうことか。

「だから一緒に実行委員やれてよかった、と.....」

「そういうこと」

俊彦はうなずいて、注がれた酒を飲みほした。

「川端さん、松平さん、お疲れ様」

山岡が受付に姿を現した。首からカメラをさげている。

「あら、写真はもう終わり？」

山岡はうなずいた。パーティーの間、各テーブルを回って写真を撮っていたのだ。

「そうだ、川端さん」

名前を呼ばれ、依子は顔を上げた。

「さっき、大丈夫だった？ 怪我は？」

依子は首を横に振った。

「依子ったら嫌よね。何もないところで転ぶんだもの」

理恵を睨んだあと、山岡にほほ笑む。

「大丈夫。ありがとう」

そう言って、依子は何か思い出したようにうつむいた。頬が上気している。理恵が立ち上がり、山岡に目配せをした。山岡はうなずき、理恵とともに立ち去った。

しばらくして理恵が戻ってきた。一人だった。

「もう閉会ね。片付けるわよ」

依子はまだうつむいている。理恵はため息をついて、依子の背中を勢いよく叩いた。

依子は「ひゃあっ」と声を上げ、やめてよびっくりするじゃない、と抗議した。

「ぼうっとしてるのが悪いんじゃない。さあさあ、片付けの時間ですよ」

依子は立ち上がり、まったくもう、とつぶやきながら撤収準備を始めた。久美子と佳恵も加わり、片付けは存外にはかどった。

「じゃあまたおしゃべり会でね」理恵と依子は二人を見送った。

(23)

恩師による閉会の挨拶のあと、あらためて閉会の言葉があり、参加者は 224 名と発表された。卒業 15 周年の同窓会は毎年やっているが、今年はまれにみる盛況ということだった。

「もう終わりか。なんだか物足りないな」

俊彦が言うと、小西はうなずいた。

「二時間なんてあっという間だよな」

そう言うと、あらためて旧友たちに話しかけた。

「俺の知り合いが喫茶店始めたんだ。よかったら一緒に行かないか？」

「喫茶店？」

旧友の一人が言った。

「てことは、アルコールは無し、だよな？」

「なんだよ池田、お前まだ飲み足りないのか？」

俊彦が笑いながら言った。

「いや、言えば用意してもらえるはずだ。何が飲みたい？ 電話して頼んでやるよ」

「おお、小西くん、気がきくねえ。それじゃあ——」

あれだけ飲んでおいて、まだ飲むとは。呆れていると、山岡が話しかけてきた。

「ようトシちゃん、どうだった、パーティーは」

「すごい盛り上がりだったな。びっくりしたよ。こんなに人が集まるとはね」

「まあ、それは俺と松平さんのおかげだな」

そう言って山岡は笑った。

俊彦は、小西の知り合いがやっている喫茶店へ行かないかと尋ねた。山岡は少し考えるそぶりを見せたあと、行くと答えた。

「そうだな、片付けはほとんど終わっているし、皆とも話したいから」

よかった――。

「松平さんと川端さんにも声かけてくるよ」

「え？ あ、ああ」

冷静に言ったつもりだったが、やはり声が上ずっている。依子の華奢な肩の感触が、今でも両掌に残っていた。いったい、どう接すればいいのか――。俊彦は不安を隠せなかった。

しばらくして山岡が理恵と依子を連れて戻ってきた。俊彦は笑おうとしたが、頬にこわばりが感じられる。やはり緊張しているのだと、俊彦は落ち込んだ。一方の依子も、俊彦の顔を正面から見られずにいた。依子はそっと肩口に手を触れ、小さく深呼吸をした。

(24)

「皆さん、お久しぶり。小西くんがどこかいい所に連れて行ってくれるんですって？」
理恵は学生のときと変わらない明るい笑顔を振りまきながら、俊彦たちの輪の中に入った。
「おお松平さん、ちょうどいい所へ。一杯どうですか」
池田がビールを差し出す。
「ごめんなさい、私いま禁酒してるのよ」

「ええ？」と驚く男性陣。
「酔うと暴力的になっちゃうから」
その言葉に場の空気が凍りつく。
理恵は笑って言った。
「冗談よ。でも禁酒は本当なの。医者に止められてて」
凍りついた空気が、あっという間に和らいだ。それと同時に、男性陣が口々にしゃべり出す。
びっくりしたと言う者、松平さんは相変わらずだと言う者、最初から冗談と分かっていたと言う者.....。

それらの声にまじり、依子が理恵に耳打ちした。
「ちょっと理恵、あなたお酒はからっきしダメなんじゃないの」
「いいじゃない。その方が断りやすいでしょ」
「もう、理恵ったら」

「川端さんも来るんだよね？」
その言葉に体をこわばらせた依子だったが、目の端で小西の姿をとらえると、ホッとしたような笑顔を見せた。
「え、ええ。喫茶店だってうかがったけれど」
「うん、僕の知り合いがやっててね、近くに来たら寄ってくれって言われてたんだ」
「まあそうなの。楽しみだわ！」

俊彦と二人で話せるかもしれない、と依子は喜び、でも——と、すぐにその考えを打ち消す。この日を迎えるまでは、何かあるかもと期待した。いざ「何か」が起こってみると、激しい心の揺れを感じるのだった。いったい、どうしたら.....。依子は自問したが、答えは出なかった。

(25)

喫茶店へ向かう道中、依子は、理恵、山岡、小西と並んで歩いていた。俊彦は別の友人たちと一緒にその後ろからついて行っている。依子たちの間から時折笑い声が聞こえ、話の内容が気になって仕方なかった。両隣の旧友たちは足元もおぼつかない状態で、しきりに議論をふっかけてくる。

俊彦は内心恨めしく思いながら、放っておけずに相手をしてやった。俊彦はかつて兄から、それがお前のいいところだ、と言われたが、自分ではそんな風には思えなかった。
俺が毅然とした態度を取れば、こんなに絡んでくるはずはない。毅然と言おうとしているのに、いつも弱気になって.....。ミチルにも言われたっけな。あなたはお人よし過ぎるのよ、って。まったく、なんでこんなことに.....。などと考えながら歩いていると、いつのまにかお目当ての喫茶店に着いていた。理恵たちはすでに中に入っている。

「わあ、すごい、お洒落なところね」

「本当、素敵だわ。ねえ理恵、いつものおしゃべり会、ここでやらない？」

「いいわね、あとで久美子たちに連絡しておくわ」

「おしゃべり会、というのは？」

山岡が尋ねると、依子が少し恥ずかしそうに答えた。

「私たち四人で、月に何回か集まってどうでもいいおしゃべりをしているの。その場所にここを使わせてもらおうかなって。ね、理恵」

「そうなの。女四人寄ったら、かしましいなんてもんじゃないわよ～。山岡くん、興味あるならご招待するけど、いかが？」

「いや、けっこうです。遠慮しておきます」

山岡が言うと、どっと笑いが起こった。

足元がおぼつかなかった池田は、しばらく他の旧友たちと飲んでいたが、気がつくと皆カウンターで寝てしまっていた。俊彦はマスターに薄手の毛布を出してもらうと、それを全員にかけてやった。まったくしょうがないやつらだ、と口では言いながら、風邪をひくようなことがあってはいけないと、そう思ったのだった。マスターと笑顔で言葉を交わし、ひと仕事終えた俊彦は、テーブルに戻ると、依子のいる方に目をやった。

(26)

依子と理恵は、山岡、それにもう一人別の旧友と同じテーブルに座っている。俊彦は小西や岸本と一緒だった。川端さんと話すには、外に誘ったほうがいいかな。俊彦は思い切って席を立つと、依子たちのテーブルへ移動した。

「川端さん」

依子はまっすぐに俊彦を見た。吸い込まれそうなその目に一瞬ひるみかけたが、勇気をふりしぼって言葉を続ける。

「よかったら、ちょっとお話し、できないかな。散歩でもしながら」

依子は内心、飛び上がりたくなるほど感激したが、心の揺れはまだ収まっておらず、戸惑いを隠せない。

「でも.....」と下を向く。と、そのとき、理恵が山岡に目で合図した。

「ほんのちょっとでいいんだ。パーティーではあまり話せなかったから、そのお.....」

その言葉は山岡に遮られた。

「おお、散歩か、いいなあ。俊彦、俺もちょうどタバコ吸いたかったんだ。散歩に行くなら俺も連れてってくれよ」

「なんだよ、俺は川端さんと話してるんだ」

「いいじゃないか、俊彦。俺も連れてってくれよ」

執拗に食い下がる山岡の言葉に、俊彦はハッとした。山岡が「俊彦」と呼ぶときは必ず何か真剣な話があるときだ。これは付き合うしかない.....。そう観念して、俊彦は山岡と一緒に店を出て行った。

異様な雰囲気を感じ取ったのか、もう一人の旧友は別のテーブルに移動し、残っているのは理恵と依子だけだった。理恵が依子にきつい口調で言う。

「ダメじゃない。ちゃんと断らなきゃ」

「だって、せっかく誘ってくれてるのに」

「そういう態度が誤解を招くのよ。まさか、何かあるかもなんて、期待してるんじゃないでしょうね」

「わからない、あるかも.....」

「何を言ってるのよ！ ご主人に愛されて幸せなのに、何が不満なの！？」

「愛されてるなんて、理恵に何が分かるのよ！ あの人は私のことなんてどうでもいいの。そういう人なのよ」

(27)

理恵はいてもたってもいられなくなり、依子の両肩をつかんで言った。

「いい、依子。あなたのご主人は、あなたが出かけるときはいつも早めに帰宅して、いつあなたから連絡があってもいいようにしているの。それなのに、愛されてないなんて、どうでもいいなんて、あんまりじゃない。あなたは本当に大切にされているのよ」

ひと息ついて依子を見た。案の定、そんなはずはないという顔をしている。

ここまできたら、すべてを話そう――理恵は決心した。

「夕方待ち合わせしたときがあったわよね。あのとき、あなたの携帯にかけようと思って、間違って家にかけちゃったの。そしたらご主人が電話に出て、そう教えてくれたのよ。ご主人がどんなにあなたのことを心配しているか、どうして分からないの！？」

「うそでしょ？ なんで？ だって、あの人は.....」

混乱した様子の依子に、今度はやさしく語りかける。

「お家に電話してみたら？ きっとご主人が出るはずよ」

依子は立ち上がり、店内の公衆電話で自宅の番号をダイアルし始めた。

呼び出し音が鳴る。2 回、3 回.....「はい、川端ですが」

その声は紛れもなく夫のものだった。その瞬間、依子の目から涙が溢れた。

「あたし、依子です。あなた.....」

「どうした？ 何かあったのか？ 迎えに行くから、今どこにいるか教えてくれないか」

夫の言葉が依子の胸に突き刺さる。

「いいんです。あなた.....」

依子は胸がいっぱいで言葉を続けられなくなっていた。理恵が代わって受話器を取る。

「松平です。すみません、言わない約束でしたけど、全部話してしまいました。依子には何も変わったことはありません。今ちょっと、胸がいっぱいみたいですけど」

(28)

依子の夫はそれだけですべてを悟ったようだった。

「ああ、いいんですよ。僕のほうこそ言わないでくれなんて、不躾なお願いをしてすみませんでした。依子が落ち着いて話せるようになったら、代わってもらえますか」

「分かりました。ちょっとお待ちください」

理恵は受話器を手で押さえると、その場にうずくまって泣いている依子に声をかけた。

「ご主人が代わってくれって。話せる？」

依子はためらいながらも涙をふき、立ち上がると、受話器を受け取った。

「もし、もし」

「こっちは大丈夫だよ。帰るとき電話してくれたら、駅まで迎えに行くから。夕飯でも一緒に食べよう」

受話器越しに夫の声を聞きながら、依子はあらためて、理恵の言葉をかみしめていた。ずっと前、理恵が言っていたように、大切なものは目に見えない。そして自分は、危うく大切なものを見失ってしまうところだった、と――。

依子は明るい声で言った。

「今から帰ります。今日はお友達より、あなたとお話ししたいですから。新しくできた洋食レストランに行きましょう。はい、はい、わかりました。駅でまた電話します」

受話器を置くと、依子は言った。

「色々ありがとう。理恵に何が分かるの、なんて言ってゴメンなさい。反省してるわ」

「いいのよ、そんなこと。早く帰って、夫婦水入らずで過ごしたらいいわ」

「うん、そうする。じゃあ――。あ、原田君たちに挨拶できないけど、よろしく言っておいてくれる？」

「任せて！」

依子は急いで上着を着ると、バッグを持って出口に向かった。ドアを開けたとき、俊彦たちとすれ違った。

「ごめんなさい、お先に失礼します」

そう言うと、駅に向かって走り出した。その表情は明るく、喜びに満ちていた。

(29)

「さて、俺たちも失礼するか」

俊彦が戻ると、小西は誰にいうともなく言った。

「なんだよ、来たばかりじゃないか。それに、池田たちはどうするんだ？」

「なに？ 俺たちがどうしたって？」

声の主は池田だった。すっきりした顔で、俊彦を見ている。

「そういうこと」

小西は俊彦の肩をポンとたたき、マスターに挨拶した。

「ごちそうさま。会社のやつらにも宣伝しとくよ」

小西が出て行くのを見て、俊彦と一緒に戻った山岡も店を出る。

「じゃあな、俊彦」

次々に旧友たちが出て行く中、俊彦は理恵がまだ店内に残っているのを見つけ、とりあえずコーヒーをもう一杯、理恵と一緒に飲むことにした。

「松平さん、ここ、いいかな」

「ああ、どうぞ、原田君」

そう言って、理恵は読みかけの本に目を落とす。

俊彦は「散歩」に出かけて山岡と話したことを思い出していた。

二人は喫茶店から少し歩いたところにある、小さな公園のベンチに腰掛けた。公園といっても単にその一角が区切られていて、ベンチがいくつかと、ブランコらしきものがあるだけだ。日曜の昼下がりという時間のせいか、ベンチにもブランコにも、子供の姿はなかった。

「懐かしいな、お前と二人でこうして話すなんて」

山岡はしみじみと言った。

「小西から聞いたんだろう？」

突然の質問に俊彦は面食らって「え？」と聞き返した。

「俺が川端さんに告白したってこと」

「ああ、うん。聞いた」

「俺のこと嫌な奴だと思っただろう」

「まあ、いい奴と思わなかったのは確かだな」

「そうか。俊彦らしいな」

フッと笑うと、山岡はタバコに火をつけた。一度吸い込んだ後、ふーっと煙を吐き出す。

「俺は、ずっと川端さんが好きだった。卒業してからもずっと。でも、そんな俺にも他に好きな女がいた」

「川端さんのほかに、か」

「ああ」

(30)

それは意外な告白だった。山岡は依子のことを思い続けているために独身なのだと、先ほどのパーティーで聞いたばかりだった。

「幼馴染みでな、志おりっていうんだ。卒業して故郷に帰って、久しぶりに会ったんだが、川端さんにそっくりなんだ」

「そっくり？」

「空気感が似てるんだよ。ずっと俺のことが好きだったって言うから、フラれたショックもあって、付き合うことになった。だが付き合えば付き合うほど、川端さんとは違う、って思ってなあ」

そんなことが.....。

「お前は川端さんの代わりにはなれないって、事あるごとに言い続けてた。本当に悪いことをしたと思ってる」

山岡はまた、タバコを大きく吸い込み、煙を吐き出した。

「その彼女は今、どうしてるんだ？」

「死んだよ。事故で。でも俺が殺したんだ」

「なんでだよ？ 事故だったんだろう？」

「俺が原因を作ったんだ。俺があんなこと言わなけりゃ.....」

「どういうことだ？ 分かるように説明してくれよ」

山岡はゆっくりと立ち上がり、ベンチの反対側に置かれた灰皿まで歩いて行った。そしてタバコを消すと、俊彦の隣に戻って腰をおろし、話を続けた。

「5 年くらい付き合って結婚を考えるようになったんだが、川端さんのことが忘れられなかった。志おりも、自分を見ていないと分かっていたんだろう。俺に食って掛かって、いい加減あきらめろって言ったんだ。結婚しているのに、その奥さんを奪うつもりか、ってな。俺もカーッとして、お前に何が分かる、しょせん代用品のくせに、って言っちまった」

山岡はひと呼吸置いた。先を続けるかどうか、迷っているようにも見えた。

「それで？」

「そうしたら志おりのやつ、急に飛び出してどこかへ行っちまった。さすがにまずいと思って、すぐ探しに出たんだが、そのときには、もう.....」

もう.....？

「トラックに、轢かれていた。即死だった。ブレーキを踏んだが間に合わなかったそうだ。しかも——」

山岡は嗚咽をもらした。

(31)

「志おりのお腹には子供がいた。まったく気づかなかった。あいつはきっと、子供ができたから、父親らしくなれと言いたかったんだろう。それなのに、俺は.....」

嗚咽が激しくなった。俊彦は黙って、山岡の隣に座っていた。

「いなくなって初めて分かった。俺は最初から、志おりのことが好きだったんだ。川端さんに惹かれたのは、志おりに似ていたからだ。だが気づくのが遅すぎた。俺は、大切な人を失ってしまった.....」

こらえていたものが一気に噴出したように、山岡は声を上げて泣いた。俊彦は座っていられなくなり、立ち上がったが、山岡のようにタバコを吸うわけでもなく、ただその辺

を行ったりきたり、ウロウロするだけだった。

こんなとき、俺はどうすればいいんだ？ だが何より、山岡はなぜ俺にこの話をするんだろうか？ 俊彦は頭の中で考えをめぐらした。だが結論は出ない。なおも行ったりきたりしながら、それとなく山岡の様子を伺うと、どうやら少しは落ち着いているようだった。

俊彦はベンチに戻り、「大丈夫か？」と声をかけた。

山岡は照れくさそうにうなずいて、すまなかった、と言った。

「なあ、俺に話したかったのは、そのことだったのか？」

「いや、そうじゃない。だが先に話しておかなきゃいけないことだったんだ。取り乱してスマン」

山岡は新たにタバコに火をつけ、口にすると、自分を落ち着かせるように煙を吐いた。

「俺が言いたかったのは、お前と、川端さんのことだ」

「俺と、川端さん？」

俊彦はびっくりしたように言った。

「ああ」

もう一度タバコを吸って、煙を吐き出すと、山岡は俊彦を見て言った。

「俺は、川端さんに幸せになって欲しい。そして、お前にもだ」

「俺にも、って、どういうことだよ」

(32)

「お前には妻子がいて、充足した生活を送っている。俺は愛する人を守れなかった。同じ道を歩んで欲しくないんだ」

「愛する人.....川端さんのことか？」

「ちがう、俺にとって守るべき存在。つまり、志おりと、俺の子供だ」

あ――。

「お前だけじゃなく、お前のカミさんにも子供にも、幸せになって欲しい。もちろん川端さんにもだ。志おりと俺と、俺の子供の分までな」

志おりと俺と、俺の子供の分まで.....。

その言葉を、俊彦は頭の中で何度も反芻した。

「なあ、さっき松平さんが目配せしてただろう？ あれは、何かの合図だったのか？」

「ああ。パーティーが終わるころ、松平さんから相談されたんだ」

「相談？」

「詳しい話は省略するけど、川端さんのことでな」

「川端さんの.....」

山岡はうなずいた。

「小西の知り合いがやってる喫茶店に行くから、一緒に行って、ゆっくりコーヒーでも飲みながら話したら、と提案したんだ」

そうだったのか.....。

「二人で話したくなったら合図してくれれば、別のテーブルに移るから、ってな。お前が来るのは予想してなかったが、折を見て行こうと思ってたし、まあ一石二鳥かなとは思ったんだけどな。ははは」

山岡の笑い声につられるように、俊彦もははは、と笑った。笑いながら、あらためて山岡に感謝した。自分は後先を考えず、成り行き任せだ、などと思っていたのが恥ずかしかった。自分の家族だけではない。依子の夫や、理恵ら友人たちも巻き込んでしまうと

ころだったのだ。何より、依子を深く悲しませることになったかもしれない。

理恵にも山岡にも、そしておそらく依子にも、この十五年、いろいろなことがあったのだ。みんな幸せになってほしい。俊彦はこのとき、心からそう思っていた。

(33)

俺は馬鹿だ、大馬鹿だ。本を読む理恵と向かい合い、俊彦は心底そう思った。だが同時に、馬鹿な自分を心配してくれる人間がいることを、ありがたいと思っていた。

「松平さん」

「なあに、原田君」

理恵は本から目を離さない。

「松平さんは、結婚してよかったと思ったことはある？」

「ええ？ 何、いきなりどうしたの？」

理恵はびっくりして顔を上げた。

「いや何となく、どうなのかなと思ってさ」

あらためて俊彦の顔をじっと見ると、理恵は言った。

「そうねえ、最近はそう思うようになったかな」

「最近？」

「うん。正直、あたしはすごく扱いづらいと思うの。メンドクサイ人、って言うのかな。だから、一緒にいてくれるダンナには感謝してる」

「そうなんだ.....」

「原田君はどうなの？」

「俺？ いや、俺は.....」

俊彦は頭をかいた。

「よかったと思ったことはないなあ。なんで結婚したんだろう、って思うばっかりで」

「まあ。でも、この人でよかったって思える瞬間はあるはずよ。普段気づいていないだけじゃない？」

「そうかもしれないな。何せ俺、家のことも、子供のことも任せっぱなしだから」

「それはよくないわ。あなたも家族の一員なんだから、少しは関わったほうがいいわよ」

「.....そうだよね、家族の一員。なんだか、俺は家族じゃないみたいな気がしてた」

「まあひどい。そんなこと言ったら、奥さん泣いちゃうわよ」

(34)

結婚当初のころの出来事が昨日のことのように、鮮明によみがえってくる。

――ミチルが変わったんじゃない、俺が変わったんだ。何でも話せる人と結婚したのに、俺が何でも聞いてやるって言ったのに、何も話さず、何も聞いていなかった.....。

理恵との会話もそこそこに俊彦は立ち上がり、会計を済ませると、上着を抱えて店を出ようとした。だが大事なものを忘れている。理恵はくすっと笑いながら、俊彦の忘れ物を手に取った。

「原田君、カバン忘れてるわよ」

俊彦はあわてて戻り、カバンを受け取った。

「ごめん、ありがとう」

「どういたしまして。あわてて転ばないようにね」

俊彦はニコッと笑うと、ドアを開けて出て行った。

窓ガラス越しに俊彦の後ろ姿を見送りながら、理恵はつぶやいた。

「やれやれ、一件、じゃなかった、二件落着か」

そして椅子の背にもたれかかり、大きく伸びをした。うーん、と声を出し、マスターに声をかける。

「マスター、あたし今、とっても乾杯したい気分なの。付き合ってくれない？」

俊彦は家路を急いだ。今日は剛一の模擬面接だと言っていた。もう終わっただろうか。何時に帰るか聞いておけばよかった。いや、メモを残してくるべきだったか。早くミチルに会いたい。信号待ちをしながら、俊彦はかつて経験したことがないほどの高揚感をおぼえた。この信号を渡ったらすぐだ。早く青になれ――。

「ただいま」

息を弾ませ、俊彦はドアを開けた。家の中は、しーんと静まりかえっている。ミチルがいるときは、おかえりなさいと声がして、スリッパのパタパタいう音が聞こえるのが常だった。

「留守か」

そうつぶやくと、俊彦は玄関の上がりかまちに腰をおろした。そのとき、ミチルの声がした。

(35)

「早かったのね。同窓会じゃなかったの？」

俊彦は驚いた。なぜ、そのことを？

「え、あ、ああ。同窓会、だけど、俺、話したっけか」

「話さなくたって分かります。案内状、鏡台に置きっぱなしだったわよ」

「あ、ああ、そうか。すまない」

「別にいいですけど」

変な人、とつぶやいて、ミチルは玄関からダイニングテーブルに移動した。

俊彦も、ミチルと向かい合うようにダイニングテーブルについた。

「あなた、お茶は？」

「うん、いただくよ」

「今日は暖かかったですね」

「そうだな.....剛一は、どうしてる？」

「外で遊んでます。さっきお友達が迎えに来て。夕飯までには戻るように言ったけど、今日は遅いかもしれないわ」

「何かあったのか？」

ミチルはため息をついて俊彦の顔をじっと見た。

「私が悪いって、あなたは言うでしょうけど」

「お前が悪いって？」

「あなたいつも言うじゃない、俺は子供の面倒まで見られないんだって」

俊彦は頭をかいた。理恵と話したあとでは、自分の言動に恥じ入るばかりだ。

「そうだったな。すまない。俺もこれからは、もう少し剛一のことを考えるよ」

それを聞いたミチルは、信じられないという顔をした。

「何かあったの？」

「何もないよ。本当にすまないと思った、それだけだ。それより剛一のこと、話してくれないか」

ミチルはうなずいて、ゆっくりと話し始めた。

剛一は昨夜から元気がなかったが、緊張しているのだろうと思い、それほど気にしていなかった。しかし会場へ着いても上の空で、見かねた塾長に注意される始末。

「模擬面接といえども、そんなことでは通りませんよ」

周囲からクスクスと笑い声が漏れ、顔から火が出るほど恥ずかしかった、とミチルは言った。

(36)

模擬面接を受けたものの、判定は「不合格」。やる気がないなら来なくていい、とまで言われてしまった。帰ってからもボーっとしている剛一を、ミチルは強い口調で問いただした。顔を上げた剛一は、目に涙をためていた。

「僕、私立なんか行きたくない。卓磨くんと同じ中学に行って、サッカークラブもずっと

続けたい。ねえ、お母さん。一生のお願いだよ」

なぜ？ これまでそんなこと一度も言わなかったのに――。私立の中学に行かなければ、お父さんよりいい大学に入れないし、お父さんよりいい会社に就職できないのよ。混乱したミチルはとっさにそう言ってしまった。

「お父さんの悪口言わないで！」

「悪口なんて――」

「悪口じゃないか！ 僕はただサッカーがしたいだけなのに、それがなんでいけないんだよ！？」

ミチルは何も言えなかった。そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

「卓磨くんだ！ サッカーしに行ってくる」

そう言うと、Ｔシャツの袖で涙をぬぐい、剛一は出て行った。

「夕ご飯までには帰るのよ！」返事はなかった。

すべて話し終え、ミチルは大きくため息をついた。俊彦は何かを考えていたが、しばらくして口を開いた。

「剛一の好きにさせてやろう」

「でも、あなたも賛成したじゃない。私立に行かせようって」

「そうだけど、無理に行かせることもないだろう。高校から受けられる私立だってあるし」

「それは、そうですけど.....」

「俺たちにできるのは、剛一が一人で生きていけるようにすることだ。そうだろう？」

「え、ええ」

「剛一は、ミチルに逆らった。とても勇気の要ることだ。それまではい、はい、と言うことを聞いてきたのに、急に反抗する。だが急じゃない、十分に考え抜いたことなんだ。剛一は、大人への一歩を踏み出したんだよ」

俊彦はお茶をひと口飲み、さらに続けた。

(37)

「祝福する意味でも、好きにさせてやろう。サッカーを続けたいなら、勉強と両立させろと言えばいい。途中で投げ出したり、怠けたりしたら叱ればいい。最後までやり遂げさせる方が、剛一のためになるんじゃないかな」

ミチルはじっと聞いていたが、急に下を向いて泣き出した。

「おい、どうしたんだ。ミチル。責めてるわけじゃないんだぞ」

なだめる俊彦に、ミチルはかすれた声で言った。

「違うの。話を聞いて、一緒に考えてくれたことが嬉しいの。私ずっと、いい母親にならなくちゃって思ってた。あなたの手をわずらわせちゃいけないって.....」

こみ上げる嗚咽をこらえ、ミチルは言葉を続ける。

「それに、同窓会のこともあったし」

「同窓会？」

ミチルは小さくうなずいた。

「案内状、鏡台の上に置きっぱなしにしたじゃない？ あれを見て、いつ話してくれるんだろうって思ってたの。でも、話してくれなかった。それに案内が来てから、あなた、何だかうきうきしてた。私の知らない誰かとの再会を楽しみにしてる、そう思って悲しかった」

自分の心情を言い当てられ、俊彦は冷や汗をかいた。

「結婚してからずっと、あなたの大切な人は私、そう思ってた。でも、本当は違ったのかもしれないって、.....そんな気がしたの」

「そんなことは――」

「最後まで言わせて。お願い」

俊彦は黙ってうなずいた。

「だから余計に、頑張らなきゃって思ったの。剛一を私立中学に行かせなくちゃ、って。でもそれが、剛一には重荷だったのね.....」

二人の間に沈黙が流れる。しばらくして俊彦が言った。

「すまん。たしかに俺は浮かれてた。息苦しかったんだ。君が剛一の受験に夢中になるほど、居場所がなくなる気がして逃げたかった」

ミチルの目から、大粒の涙があふれる。

「でも逃げても、行き着くのはやっぱりここなんだ。俺にとって安らげる場所は、君と剛一のいるこの家なんだよ。同窓会に行って、やっと分かった。本当にすまなかった。君のことを一生大切にするから、だから、これからも一緒にいてくれ。頼む」

(38)

頭を下げる俊彦の前で、ミチルは大声を上げて泣いた。泣きながら話そうとしたが、しゃくりあげているので声にならない。かろうじてこれだけが俊彦の耳に届いた。

「あなた.....あなた.....」

俊彦は泣きじゃくるミチルをしっかりと抱きしめた。

「大丈夫だから、俺が守ってやるから。心配するな。なあミチル。剛一は強い子だ。お前

がちゃんと育てたんだ。だから心配するな。みんなうまく行く。俺たち三人力をあわせれば、できないことなんてない。そうだろう？ 今までそれで乗り切ってきたじゃないか。だからこれからも頑張ろう。な。」

自分の腕の中で泣きながら、うん、うん、とうなずくミチルを見て、俊彦は胸が締め付けられた。

本当に大切なのは目に見えない――。突然、剛一に言われた小説の一節がよみがえる。

本当だよな。俺が見ていなかったものが、いちばん大切なものだったんだ。これからは、決して目を離さないよ――。俊彦はミチルの額に、そっと口づけをした。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

同窓会の二年後、俊彦は転職した。収入は三割減ったが、繰上げ返済で借金も減ったので、思い切って決断したのだ。そして朝の風景ががらっと変わった。ドアを開けて最初に出てくるのは剛一。その次が俊彦。最後にミチルが出てきて、二人を見送る。

通勤時間が短くなったので、俊彦は毎朝、剛一と一緒に家を出られるようになった。地元の中学は駅へ行く途中の、角を曲がったところにある。剛一と別れるまでの数分、「男同士」の話をするのが一番の楽しみだった。子供の成長を、間近に見られるのはいいもんだ。俊彦は心からそう思っていた。

「もう、あれほど言ったのに、傘忘れてるじゃない！」

ミチルの声が響く。

「いっけねえ」剛一があわてて取りに戻る。

(39)

「はい、お父さんの傘」

「おお、すまんな。ありがとう」

「いいってことよ」

「お父さんにそんな口のきき方しちゃダメでしょう！」

すかさずミチルの叱咤が飛ぶ。

「はあい」

「はあいじゃなくて、はい！ 何度も言わせないの。三者面談があるんでしょ、お知らせ見せなきゃだめよ」

「ええ、なんで知ってるの？」

「卓磨くんから聞きました」

「あいつ裏切りやがった」

「そんなこと言うもんじゃありません。まったく、私立中に行ってくれてたら受験の心配もなかったのにね」

「あー、またそれを言うー。言わないって言ったじゃないかー」

剛一はふくれっ面をしてみせるが、もちろん本当に怒っているわけではない。次の瞬間には三人とも噴出しているのだ。

「二人とも気をつけてね。剛一、まっすぐ帰るのよ」

「はい！ 分かってます」

剛一の様子に、俊彦もミチルも笑ってしまう。あれほどぎくしゃくしていたのがうそのような、幸せな家族の姿がそこにはあった。

駅に向かう道は、なだらかなのぼり坂だ。剛一の後ろを歩きながら、俊彦は言った。

「なあ剛一、好きな子いるのか？」

「なんだよいきなり～」

「お父さんもお前くらいのころ、好きな子がいたからな。どうなんだ？」

「それは個人情報だよ、お父さん」

「個人情報？ なんだそりゃ」

途中、剛一の後ろから右隣へと移動した俊彦は、前方から来た女性とすれ違いざま、肩がぶつかってしまった。

「失礼」と一瞬女性に目をやったが、すぐに前を向き、剛一と並んで、まっすぐ歩いていった。途中、剛一が角を曲がり、俊彦はじゃあ、と声をかける。

二人の後ろ姿を見ていた女性は、向きなおり、ベビーカーに目を落とす。そして赤ん坊をあやしながら、坂をくだり、俊彦たちと反対の方向へ去っていった。その顔には、安らかな微笑みが浮かんでいた。

おわり

(40)

あとがき

2012 年の 2 月から公開を始めた『絆～ほんとうに大切なもの』。
パブー版はいかがだったでしょうか。

改変はしないようにと思っていたはずなのに、終わってみたらいろいろと手を加えていました。書き足したほうが意味が通ると思ったり、逆にここは削ったほうがいいと思ったり。一度そう思うと、やはり直さずにはいられなくなってしまいました。ウェブ連載のときと大筋では変わっていないのですが、お話の印象は変わったかもしれません。

最後まで読んでくださり、どうもありがとうございました。
また別の作品でお目にかかるのを楽しみにしています。

2012 年 3 月 30 日

比良岡美紀

奥付

絆〜ほんとうに大切なもの　パブー版まとめ

版番号の予定

{{--
--}}

著　者　　書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社